

## 第10回 多摩市自治推進委員会 要点記録

日 時：令和5年6月26日（月）18：00～20：00

場 所：多摩市役所3階 特別会議室

出席委員：大杉覚委員、小山弘美委員、寺田美恵子委員、林久美子委員、塩沢泰弘委員

欠席委員：丸茂嶺介委員

オブザーバー：合同会社 MichiLab 高野義裕代表、

一般社団法人コミュニティネットワーク協会 渥美京子理事長

事務局：田島市民自治推進担当部長、伊藤健康福祉部長、松崎福祉総務課長

西村企画調整担当主査、三橋、荒川

傍聴者：0名

議事次第：配付資料「第10回 多摩市自治推進委員会 議事次第」のとおり

### 1 開会

委員長 第10回第八期多摩市自治推進委員会を開催する。

まず、事務局から資料の説明をお願いしたい。

事務局より、配布資料（前回の要点記録・次第・資料25～26・参考資料1～11）の確認を行った。

委員長 次に、第9回委員会の要点録の原案について、修正はないか。

修正はないようなので、これで確定とする。

委員名を特定しない形で市公式HPや行政資料室等で公開される。

### 2 モデルエリアでの検討状況報告

委員長 次第2の「モデルエリアでの検討状況報告」に移る。前回以降、モデルエリアでの活動が進んでいるため、その内容と今後の取組みについて、まず事務局から報告をお願いしたい。

事務局より、資料25・参考資料1～8に基づき報告

委員長 続けて市民提案事業実績報告会に参加された委員、また、オブザーバからそれぞれのエリアでの活動の報告についてご発言をお願いしたい。

委員 市民提案事業実績報告会があったのでご報告する。事業が予定通りにいかなかったというところもあったが、概ねしっかりと活動した、という報告がされた。ただ、残念なことに、採択する時もそうであったが、一部の関係者しか聞いていなかったことが残念であったと思う。とても有意義な活動であったので、大事な税金を投入したわけだから、それを多くの市民の方に知ってもらえたらなお良かったと思う。

委員長 ありがとうございます。続けてオブザーバーよりご発言をお願いしたい。

オブザーバー 諏訪中学区において実施したこととして、馬引沢・諏訪地域福祉推進委員会主催の地域見守りウォーキングの取組みを行った。去年はたんけん隊というものとして私たちの方でお手伝いしたものを、今年は子どもたちにも参加してもらいたいということで、地

域の特徴的なものを写した写真を見せて、それがどこにあるのかを探しながら歩く、というゲーム性を持たせたイベントとして開催した。私たちはアイデア出しと当日の運営を手伝った。実際のところ来てくださった親子は4組ということでだいぶ限られた人数となったが、少なくとも私が接していた子どもは非常に喜んでくれていたので、企画としては良かったと思う。地域福祉推進委員会からの発信ではなかなか子育て世代に届いておらず、私たちも同世代に声をかけていくことに苦戦しているの、引き続き子育て世代へのアプローチが課題であると再確認された。青陵中学区については、事務局からも説明があったように7月2日にエリアミーティングの開催を予定しており、その後には多摩BOOKさんぽやランタンフェスティバルも控えているので、エリアミーティングの参加者がそのような場にも引き続き出てきてくれるよう誘導ができれば良いと思う。

委員長 ありがとうございます。続けてオブザーバーよりご発言お願いしたい。

オブザーバー 資料をご覧ください。4月と5月のコミュニティブレイスあたごの様子は、来場者数の実績としては、5月は営業日数20日で551人であった。内訳として、男性は190人、女性は361人、年代別では、幼児が8人、小中高校生が18人、大学生が21人、64歳以下が129人、65歳以上が375人であった。食に力を入れていることから配食サービスをしたり、ボトルキープをしている住民が何人かいたり、常連さんとして来てくださる方がいる。また、地域の様々な方が地域のイベント等で飲食スペースを使われる等しており、4月にオープンしてから5月、6月となんとかやってきている。

委員長 ありがとうございます。

それぞれの説明に対して、意見や質問等はあるか。

副委員長 事務局の説明で、青陵中学区のエリアミーティングの参加者募集を無作為抽出で行っているとの事であったが、どれくらいの人数に対し発送し、そのうちどれくらいの方が参加する予定であるか。

事務局 このエリアは貝取・豊ヶ丘を中心としたエリアであり、多摩ニュータウンの真ん中、多摩センター駅と永山駅のちょうど真ん中あたりに立地しているが、エリアミーティング会場となる貝取こぶし館が立地している南側の地区は高齢化率がすでに50%を超える地区が多い。地域福祉推進委員会等の既存の活動への参加を呼び掛けたりすると、参加されてくる方の年齢層は高い。今回、64歳以下の世代にも参加してもらえるようにアプローチしていきたいと考え、15歳から64歳までの約1,800人に対し案内を送付し、約40名の参加を予定している。

副委員長 このエリアミーティングには、無作為抽出された方のみが参加できるのか、それともそれ以外の方も参加できるのか。

事務局 既存の活動をしている方にもお声がけしており、青少協やコミセンの運営協議会の人たちの参加も予定している。

委員長 参加者の中には、既存の活動を行っている方も無作為抽出で選ばれた方も交ざっているということで理解した。

今オブザーバーからお話のあったように若い人たちにどう情報を伝達し、地域に出てきてもらうかというのは大きな課題であろう。委員からお話しがあった報告会につい

ても広く参加者を呼ぶために何かしらやりようはあると思う。

### 3 検討内容の意見交換

委員長 次第3の「検討内容の意見交換」に移る。事務局から報告をお願いしたい。

事務局より、資料26・参考資料9～11に基づき報告

委員長 多摩市協創ビジョン、多摩市自治基本条例改正案、その他情報提供があったが、本日は特にビジョン案や条例改正案について、追加すべき点、洗練させる点、見直していくべき点などご意見があればお願いしたい。

委員長 それでは、まず私から意見を述べさせていただきます。

今まで協創と地域協創という言葉を使ってきており、今回自治基本条例に入れていくにあたって整理する必要がある。協創という言葉自体は様々な自治体で使われており、自治推進委員会では具体的なエリアでの実践や制度を踏まえて地域協創について議論を行ってきた。言葉の問題としてどう扱うか気になるところである。今まで参画、協働という自治基本条例の中に中心的な理念としてある言葉に加えて、協創というものをどういう位置づけで入れていくかということが重要な点になってくる。

副委員長 協創ビジョンについて、3ページ目の負のループだったのが、4ページ目の「持続可能な未来へ」では、いろんなところがつながって解決するということだと思うが、強調されている「若者の活躍」や「コミュニティ強化」の2項目だけでは解決できないのではないと思う。例えば、いろんなものが丸くつながって効果が広がっていき、結果、協創としてつながって解決できるように見えると良いと思う。

しくみとしかけについては今までの議論のとおりだと思う。条例について、「協創」の言葉の定義が「協働」とどう違うのかについては検討すべき。この会議の中でも多世代・多分野が重要と話されてきているので、既存の物ではないものを新たなつながりや参画者が出てくることによって作っていくということを見せたい。

今の文章だと、市が支援環境を整備すればできると読めてしまう。もう少し協創の理念が伝わるような表現となるよう議論が必要だと思った。

委員長 細かい点であるが、4ページ目の「持続可能な未来へ」のものと委員に作成いただいたものがどう違うのかわからない。若者の活躍・コミュニティの強化は個々のものに対する課題解決策ではない。課題解決に導いていく上でプラスに作用するものである。直線で解決につながります、というよりは、じわーっとつながるものである。負のループに入ってしまったものがじわじわと溶かされていくイメージとして図で示せると良い。協創の話はしっかり考えておかなければならないテーマである。

委員 なかなか鋭い指摘である。中村先生より協創のワードについて協と共の比較するというご意見を出されていたため、個人的に見返してみたい。地域ポイント・地域通貨については、最終的には地域内で回ることになると思うが、どういう予算をかけて実施するか。

事務局 まずは予算のかからない範囲で、手伝ってほしい人が自分の活動を手伝ってくれた人にポイントを投じるところから、試行的に実施したい。

委員 社協がやっているボランティアポイントとの違いやリンクのさせ方などはあるか。

- 事務局 ボランティアポイントは、介護保険の制度にあるもので、介護保険のボランティアをされた方については交付金の中から上限まで本人に付与されるものであり、目的が限定されるものである。
- 委員 それに比べると地域ポイント・地域通貨は多様性があるものと理解した。  
もう1つ、先生たちがおっしゃる話は、何か解決を目指すものではなく、目指そうとするものなのではないかと思っている。結果的に解決に導かれればいいが、現実には課題が複雑化しているので、机上で語るほど簡単ではないのではないかと、という懸念がある。でも、豊かな地域像が見えるものにしていきたい。今回案内のあったリーフレットはとても素晴らしいリーフレットだと思うが、協創ビジョンとはどうリンクさせるのか。
- 委員長 協創ビジョンが固まらないとリーフレットもできない。現時点のリーフレットはあくまでイメージとして作っていただいたものと理解している。
- 委員 これまで文字を主体に考えていることをなんとか市民にすっと落ちるようにしたいと思い、事務局と相談し、どういう物語ならわかりやすいかを検討した。日野市の地域未来ビジョンのように、種を植えそれを育てて花になるのは誰でもイメージしやすい。しかし、内容はいいものの、デザインとしては震災以降よく使われてきた物語である。そのような中、事務局から「スイングバイ」という言葉があることを聞いた。今回示したリーフレットの中に説明もあるが、ロケットなどを飛ばす際に惑星の重力を利用して、大きな力を使わずとも遠くまで行くというもの。最初のエネルギーは必要であり、最初の一步目は大変なので、中間支援機能や地域担当職員などが頑張るが、宇宙船を飛ばすのは自分自身であるということをイメージして作成した。途中でいろいろな方と出会い、団体と連携して、目指す地域像に到達するというイメージである。
- 委員 個人的には素晴らしいと思う。関心ない方を掘り起こす意味では、新しい視点やストーリー、観音開きの作りなどでおやっと思わせるのは、クリエイティブなデザインの力が重要となる。先進性があるし、宇宙視点・思考で俯瞰的に、前提条件を取っ払って考えることは大切。事務局とも話したが、一直線に行くのではなく、寄り道をするという過程は大変だけどみんな楽しんで、そこでエネルギーを得るのが重要。
- 委員 この寄り道が楽しいし、そこでエネルギーを得るのが個人個人で、そこまでのエネルギーを得る役割を行政はあまり担わない。最初はなんでも地域担当職員に任されてもという懸念があった。
- 委員長 みんなでスイングするという感覚は様々なとらえ方があるし、到達したい「未来の」というワードが入ると尚良い。
- 委員 目指すべきものを具体的な星としてしまうことで、別に地球にいるままで良いやと思われぬようにしたい。地域担当職員・スイングバイの説明をしつつ、協創（コ・クリエイション）を説明するのは難しかった。
- 委員長 スイングバイとコ・クリエイションという慣れないワードが2つ来るのが難しいかもしれないため、地域協創は出さなければダメだけど、コ・クリエイションはあまり強調しなくてもいいと思う。スイングバイを多摩市版スイングバイのようにして表現してしまうと、またどこかで説明が必要になってしまう。うまく使い分けるようなデザインにできると良い。

今回の協創はコ・クリエーションだと思っているが、中村先生はコ・オペレーションと呼んでいて、もう一つオープンイノベーションという呼び方もある。言葉は違っても同じ意味を表すこともあれば、同じ言葉で違うことを意味することもある。そう考えると最後は、条例の中での協創をどう定義するのか、という話になる。

委員 遙か彼方の輝いている星を目指してロケットで飛んでいくというイメージを持ってしまいが、私たちが今議論してイメージしているのは、遙か彼方の土地を目指していくというものではない。そのため星のイメージの仕方をもう少し変えてほしい。宇宙に飛び出す感じになってしまう。

委員長 今と違う場所に行くのではなく、あくまで今いる地域で、というイメージができるとう良い。

委員 協創ビジョンにおいて到達したい地域社会像で使われているイメージを最終的に目指すイメージとして使おうとも思ったが、一方で、スイングバイでいろいろ経験する途中のところで様々な主体と関わる、というイメージも示せば良いと思い、そちらでそのイメージ図を活用した結果、目指す先として星を表現で使った。

委員長 スイングバイでいろいろ経験するところは、その時々で変わるため、それ自体が到達するところかもしれない。デザインは再検討いただきたいが、こうやって視覚的にイメージできると、我々がやるのが明確になるのでとても良いものだと思う。

委員 負のループの記載はいらぬのではないか、課題の提示は必要なのか、巻末に多摩市情報を入れると面白いと思って記載してみたが必要か、等の検討は必要。持続可能な未来へは、単純な矢印じゃなくて、もう少しもわっとしたものに変更した方がいいか。文字の大きさはどうか。

委員 読みこなすのは大変であるが、市民に情報を提供するためには、多少字数は多くなって文字が小さくなくても興味を持ってくれる方は読んでくれるはずなので良いと思う。

オブザーバー 市民の方にやりたいことを伝えて、地域に出てきてもらうツールだと思うが、「巻き込み型」から「誘い出し型」へ、という表現は書いていいものなのか。これ自体が誘い出すような、楽しそうな資料でないといけぬし、「掘り起こす」の表現も掘り起こされる側は良い気持ちはしないのではないか。これを見て多摩市が楽しそうなことを始めているから、ちょっと地域に顔出してみようかなと思えるものにした。そう考えると楽しさを前面に出してもいいと思うし、負のループも記載しなくていいのではないか。

委員長 講演等で「巻き込むは使うな」、と言っている。言い換えるのは難しいが、誘い込む・誘い出す、もどうかなと思っている。「誘い合わせる」などがいいか。互いに誘い合うような関係性がいいと思う。〇〇型から〇〇型へというのは言わなくてもいいのかもしれない。協創ビジョンの「持続可能な未来へ」もまだ持続可能に見えないところがある。

委員 このリーフレットを見て関心を持った人がどこに連絡を取ったらいいのか、というものが入っているといいのではないか。

委員長 今はQRコードを載せておけば良いのではないかと思う。これを受け取ってどうすればいいのかとなってしまうので、これをきっかけに結び付けていけるようになれば良い。

委員 困ったときに誰に相談していいのかは明確にしたい。本当の弱者は困ったときになか

なか声に出せなかったり、一人で閉じこもったりすることがあるので、その手助けになるツールだと良い。

委員長 自治基本条例を作るときも議論になったと思うが、参画・協働と言っても、積極的に行かない人もいます。今回の協創も同様だと考えるが、どうか。

委員 昨年から福祉亭でも子ども食堂を事業化したのが、本当に困っている人は声を上げていないと繰り返し語られている。地域での信頼関係の醸成と言われているが、それをどう形にして見せていくかが重要。今は 20 年後の担い手を作っていると思って取り組んでいる。子どもたちの未来に期待しながら、育てていくことが必要ではないか。1、2 年先に答えが得られるものではないが、今足りないもの・未来にあってほしいものを盛り込めたらいい。

委員長 本当に困っている人たちに、協創の概念を出すことで、直近の課題が解決されるわけではない。徐々に信頼が醸成される中で関わりしろがあるとか、協創の理念や考え方の中にそういう部分があるということ伝えていく必要がある。そうでないと、今までの参画・協働と何が違うのか、という話になる。他自治体でも民間協創という概念を使って民間提案などを表現しているが、その協創は今までの議論の中の多摩市の協創とは異なっている。これから先の子どもたち、今困っているけど声を上げられない方なども含めて取りこぼしなく誰もが主人公と感ぜられる協創である、ということ条例の中で伝える必要がある。

委員 誰一人取り残さない、というのは現実的には難しい中でどう表現するかが大切だと思う。

委員 地域で高齢者の一人暮らしの方が多い中で、これまではケアされる対象の人が地域の中での声掛けを自発的にしている人が増えていくなど、誰もが自分にできることから始めて、地域に広めていくコ・クリエイションが生まれると良い。

副委員長 協働の中では、行政の枠組みの中で「やらなきゃいけない」ことをやっているようなものであったと思うが、委員長のおっしゃっていた関わりしろみたいな部分に、障害のある方・貧困の方など協創では福祉の支援の対象者になる方も関わると良い。誰もがクリエイティブな中に入っていけるという発想が必要であり、新しい担い手はこれまで弱者と呼ばれていた方でもいい。それを協働から一歩進めた定義として新しい協創と打ち出せると良い。

事務局 副委員長がおっしゃっていた内容は、条例改正案の第 3 条第 6 号の定義の中には入っておらず、協働の延長線上に協創を置いている。今まで自治基本条例では参画と協働を推し進めてきた背景があり、第 1 条にも、「ともに考え協力し、行動することにより、市民の福祉を向上し、豊かな地域社会の実現を図る」という記載があるが、「ともに考え協力し、行動すること」は協働のことであり、協働することで最終目的を果たすものとして進めてきた経緯があるので、この考え方は活かしていく必要があるものと考えている。そのため、協働+αが協創である、となるようにしたいと考えている。

副委員長 協働のベースに協創を置きましょうという発想もありではないか。

委員長 今副委員長がおっしゃった発想に私も近い。協働の延長が協創という考え方とは少し違う。ただ、協働のベースが協創であるということとも少し違う。協働は大切であるが、

協働を進めすぎて地域に負担をかけすぎている負の側面もあり、これまで私自身はあまり協働を使ってこなかった。積極的に関わり、そこで新しいことを何かやっていこう、という側面が協創にはある。先ほどの他自治体の民間協創の民間企業との連携も一例である。参画・協働と協創が並ぶものではないと考えている・

事務局 協働は一部の人しか関われなかったものだったかもしれない。定年退職して時間ができた方が、自分の時間を地域のために使ってみようかという考えが協働として行われ、学生等の若い世代にはこのような時間はないため関わりがなかった。そうしたものが協働だとすると、協創はそのような若い世代・子育て世代・忙しく仕事をしている方なども含めて誰もが関わられるようにすることではないか。

委員長 協働はサービスを提供する側のイメージ。一方で、協創はサービス提供があるかもしれないが、自分たち自身がサービスを楽しむということも含め、必要なサービスを作り上げて「できた」と思えることが重要だと思う。協働の場合のような恩恵を受ける受け手として弱者がいるだけではなく、協創の場合ではそのような方も主たる担い手にもなりうるもの。弱いと思われていた方も提供者側にもなり得るものだと思う。

副委員長 誰一人取り残さないように支えて、負担を分けようと言うと協働の発想だが、協創の方は誰もが参加すればいいだけで取り残される、されないではなく関われる関わりしるを思い描けるかが重要。そのためにも協創ビジョンのロケットの最初の部分が肝心。誰もが参加できる場が重要。そもそも遠い未来である宇宙に行かなくても、少し近い未来に行ければいい。

委員長 「ともに考え協力し、行動する」ことは協働の定義であるが、協創と重なっている部分がある。今の条例改正案の中で記載のある、「コミュニティ活動が推進されるよう」、また、「市の執行機関が必要な支援環境を整備」ということを言う必要があるのかという、今までの議論を踏まえるとあまり重要でないため、定義に盛りこむことではない。市として努めることとして後で書けばいいので、定義に入れなくてもいいのではないか。

副委員長 市民の人もそこに入っている情景を描いて、条文に盛り込めると良い。本日の資料にあった厚労省の内容が近いように思う。

事務局 協創の定義については検討を進めるが、何をしていくかよりも、どういう状態にあるのかを書いた方がいいように思えた。

委員長 例えば、若者を交えたワークショップなどで意見を聞いてみてもいいかもしれない。

副委員長 今日配られたのはビジョン（案）なので、これが基になって作られていくということでいいか。「実際のモデルエリアでも」のページでMさん・Wさんとあるが、この表現は堅い書き方だと感じた。もっと自分が語っているような書きぶりで表現してもらえると良いと思う。

委員長 年齢・男女等の属性を入れて、もう少し柔らかく発言しているように記載してあると良い。また、地域協創職員制度の名称も再検討いただきたい。職員同士でやってみたいと思えるような名称にしてほしい。

委員 DX関連でも試験的に募集していただきたい。DX活用として、今年の3月に釜石市でシンポジウムをやった関連で、DAO（Decentralized Autonomous Organization=分

散型自律組織。すべての参加者が意思決定に加わるオンライン組織)を使って分散型自立組織のスキームを使い、地域の困りごとを解決する取組みの話があった。多摩市版として同様の取組みを行って、誘い合わせるようになると自分も楽しみになるため関わりたいし、知人を誘い合いやすくなる。

副委員長 飲み会とボランティアをセットにして打ち出すのも良いのではないか。子育てが終わるとみんな暇していて、暇だからとなりまちまで歩いたと言っている知り合いもいた。そうした身体を使うボランティアのあとに飲み会などをすると参加してくれる可能性がある。

オブザーバー 協創ビジョンはロケットで示されており、私はそれを化学変化と呼んでいて、物事がなかなか思い通りにいかないものが、ふとした出会い等で変わったりすることもある。また、主役は誰なのかという点は共感でき、社会的弱者と呼ばれている車いす使用者なども含めて、取り残さない対象者として見るだけでなく、誰もが主人公になれるスキームを交流拠点ではトライして、準備を進めている。

委員長 12月に向けて答申をまとめ、その基になるビジョン・条例改正の原案を次回の8月に確認することとなる。

#### 4 その他

事務局 次回の第11回の日程は8月5日(土)の15時から特別会議室にて開催する。  
会議後にはコミュニティプレイスあたごに移動し、渥美さんに紹介していただき、視察を行う。

次々回の第12回は10月16日(月)の18時から特別会議室にて開催する。

この中で答申をいただければ、と思っている。

#### 5 閉会